

吉備国際大学
社会福祉学部研究紀要
第11号, 169-181, 2006

大学における障害のある学生への支援システムに関する実験研究^{*1} ーノートテイクへの報酬の影響ー

日上 耕司^{*2}、大野 裕史^{*2}、奥田 健次^{*3}、小林 重雄^{*4}

An experiment on campus supporting system for students with disabilities in higher education : Effects of economic control on note-taking

Koji HIKAMI, Hiroshi ONO, Kenji OKUDA and Shigeo KOBAYASHI

Abstract

Our last study (Ono et al., 2004) showed that some universities or colleges had campus-supporting systems for students with disabilities, and one of the systems was a reward system in which supporters to students with disabilities were paid some money for their help. The system was seemed to have positive effects, such as motivating supporters, and increasing responsibility of them etc., and also have negative effects, such as, decreasing intrinsic motivation of supporters, etc. So both of the effects of the reward system were studied by trial implementation of the system to supporters. Fourteen supporters participated with the implementation, and the total number of supporting time was 294 hours (210 hours for direct supporting, note-taking, and 84 hours for coordination between supporters and users). After the implementation, a questionnaire was carried out to participants. Statistical analysis of their responses to the questionnaire showed some positive effects, and no negative one, and could conclude that the system worked effectively.

Key words : students with disability, note-taking, effects of reward

キーワード：障害学生、情報保障、ノートテイク、金銭報酬の効果

I. 問題および目的

ノーマライゼーションや「完全参加と平等」のテーマの下に、障害のある人の社会参加が促進されるようになり、大学にも障害のある学生が入学して

くるようになった。しかし大学側の態勢は十分とは言えない。

前報（大野ら，2004）¹⁾では文献的および訪問調査によって大学の支援体制について報告した。今回

-
- * 1 本研究は、平成15年度吉備国際大学社会福祉学部共同研究（「障害学生に対する授業保障に関する研究」代表者：小林重雄）として行なわれた。
 - * 2 吉備国際大学社会福祉学部臨床心理学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町 8
*Department of Clinical Psychology, School of Social Welfare, Kibi International University
8, Iga-machi, Takahashi-city, Okayama, Japan (716-8508)*
 - * 3 現 桜花学園大学人文学部人間関係学科
〒471-0057 愛知県豊田市太平町七曲12-1
 - * 4 現 ノートルダム清心女子大学人間生活学部児童学科
〒700-8516 岡山市伊福町 2-16-9

は、支援体制の中でも障害学生を支援する学生に対し行なわれていた報酬システム*5に注目し、実験的にシステムを試行し、その影響・問題点について調べることを目的とした。

1. 実施の背景

大野ら (2004)¹⁾の調査対象4校中3校では支援学生に対する報酬システムを有していた。1校では授業の単位であり、2校では金銭であった。報酬システムを持っていない1校でも、障害学生から支援者に渡される謝金への補助を行っていた。

本学においては、聴覚障害のある学生に対するノートテイクによる支援を、聴覚障害学生支援会（以下、支援会と略記）が無償ボランティアとして行っていた。ノートテイクにあたって、テイクは授業1コマに対して2名ずつつくのが原則であった。これは、1コマ中集中力を維持するのが困難なことから、頸肩腕障害などの労働災害を防止するためであり、2～3人が10～15分交替で行うのがノートテイクを実施する際の一般的なやり方である（白澤・徳田, 2002²⁾；吉川ら, 2001³⁾）。この他の活動としては、ノートテイクの養成・技術育成のための講習会や、支援を希望する学生とテイクのスケジュール調整をするコーディネートをしていた。

2003年1月に、この支援会から本学法人へ要望書が提出された⁴⁾。要望の内容は、大きく①情報保障者への報酬（手当）、②部屋・備品の2点であった。

①の理由としては、

- 継続して活動していくためには、保障者への援助・保険が必要。

- 無償で情報保障が行なわれている場合、保障者－利用者（聴覚障害のある学生）間に上下関係ができてしまい（保障者>利用者）、保障者に対して要望がいいにくい

ことが指摘されていた。そして、既に謝金等を行っている16大学の状況を踏まえ、1コマの授業に2名の保障者がつくことと、1コマ1名につき1,500円の謝金を要望した。なお、要望書中の資料によれば、他大学ではノートテイク1コマについて平均約1200円（range：500～2000円）、手話通訳は平均2600円（range：1600～4000円）の謝金が設定されていた。

②については、支援者が会合や報告書の作成をする場所、連絡手段としてのFAX付き電話やメール機能付き携帯電話（聴覚障害のある学生との連絡には視覚情報のやりとりになる）、パソコン（パソコン通訳のため）、コピー機、ペンなどの要望がなされた。

支援会からの要望書が出されたことでもわかるように、当時本学には公的な支援システムは存在しなかった*6。そこで我々は、学内共同研究として試行実験を行ない、報酬システムの効果や問題点を探ることを考えた。実験に先立ち、次の影響が想定された。

2. 想定される影響

報酬システムは支援行動の強化を意図して導入される統制因 controlling agency である。これまで行なわれていた支援行動は自然発生的な強化子によって維持されていたと考えられる。例えば、利用者の謝意（社会性強化子）や支援者の自己の価値観の実現（自己強化）などであろう。報酬システムの導入に

* 5 本稿では、支援活動に特定の結果が後続しているシステムを「報酬システム」と呼ぶ。本稿で呼ぶ報酬システムを有する調査対象となった或る大学のガイドブックには「大学としての謝礼は“報酬”ではなく、支援活動の“奨励”のために支給しています」と、報酬という命名を否定している。また、そこでは奨励金の受給は自己申請になっており、「友人としてやっているから謝礼はいらぬ」などの場合には、申請の必要はないことがガイドブックに記されている。

* 6 2004年度から、ボランティアセンターを中心に実施されるようになった。

より、支援行動には自然発生的結果だけではなく、報酬としての金銭も随伴し、経済的制御 economic control (Skinner, 1953) の下に置かれることになる。つまり二重の随伴性によって統制されることになる。この場合、2つの随伴性が促進的に働く可能性がある。しかし逆に抑制的に働く可能性もある。

この促進/抑制効果は支援者個人の行動に対してだけではなく、支援会という集団にも及ぶことが予想される。

理論的観点からは、個人に対する促進的影響としては支援行動の強化・維持として現われる。ただし、支援機会は利用者・支援者の時間割の都合によっても制約を受けるので、従事時間の変化として測定するのは困難であることが予想される。支援者の主観としては、やる気や責任感の変化として現われる可能性がある。会に対しては、対外的にはメンバーの拡大に対して、集団内では会の維持に対して作用するだろう。

抑制的影響として考えられるのは、これまで無償であったがために維持された行動に、金銭（といういわば汚れたもの）が結果することによる効果である。ある大学で奨励金（報酬）を自己申請制として、金を受け取らないことも可能である旨明示しているのは、この抑制効果を予想していると考えられる。また、支援行動が1つのシステムによって制御されること、利用者-支援者間の関わりに金銭が介在することで発生する、精神的負担や過剰な責任感が抑制的に働く可能性もある。

システム自体が持つ影響もあるだろう。報酬システムは、支援行動の強化作因となることを意図しているが、金銭が強化機能を持つとしても、報酬額により強化機能が変わるであろう。また反応を強化する際には、反応が出現したら即時に強化子を提示するのが効果的であるが、報酬を受け取るまでには種々の手続きが必要で、支援行動から遅延することが予測される。それらの種々の手続き、例えば勤務

報告書の作成や申請などが、申請者の負担となり抑制機能を持つ可能性もある。

さらに、実験終了後、支援者に及ぼす影響が懸念された。本試行実験は一定期間で終了し、その後も報酬システムがつづく保障はなかった。内発的動機付け理論（例えば、Deci, 1971）からは、外的報酬が内発的動機付けを低下させることが予想される。すなわち、支援者は内発的に動機付けられ自発的に支援を行っていたが、金銭という外的報酬が一度与えられ、それが撤去されると支援をする意欲が低下する可能性がある。

これらを踏まえ、支援会と相談の上実施計画を立案し、以上の点について評価を行なうことを目的とした。

Ⅱ. 方 法

1. 参 加 者

参加者は、実験開始時に支援会に所属していた学生8名と、支援会が自主運営する障害のある学生のための情報保障活動においてノートテイクとして登録された学生6名、およびその利用学生3名であった。

利用者のうち2名は聴覚障害者であり、2名の支援者による講義内容の要約筆記支援（いわゆる“通常の”ノートテイク）を受けていた。他の1名は聴覚障害はないが、四肢の運動障害のため自分でノートを取ることが困難であったため、1名の支援者による板書の書写支援を受けていた。

2. 実施期間

実験は2003年度後期の授業期間（2003年10月～2004年1月）を利用して行われた。

3. 支援方法

1) 支援会との折衝

実験開始に当たり、支援会と話し合いの機会を持

ち、実験への協力を得ることができた。支援会には、どの利用者のどの講義にどの支援者を配置するか調整など、コーディネート業務を引き続き支援会が行うこと、活動時間のチェックを厳密にする方法を考案し実行することの2点を要望した。また、活動に伴う報酬額は、諸大学の先例や本学における学生アルバイト雇用制度を考慮し、講義1コマ(90分)の支援を前後の休憩時間における準備と片付け等を含め2時間と計算し、1コマの支援を1460円(730円/時間)とすることで合意が得られた。また、報酬は個々のノートテイク等だけでなく、コーディネート業務やそれに付随する支援会の会合に対してもその所要時間・人数に応じて支払われることとした。

2) 大学当局との折衝

上記をもとに、研究補助業務を行う学生アルバイトに対する謝金として学内共同研究費の一部を支出する趣旨の稟議書を作成し、大学当局へ提出し承認を受けた。謝金の支払方法は本学の規程に従い、月初めに学生ごとの前月分の勤務表と支出のための稟議書を提出し、その後、大学事務から教員、教員から各学生へと現金が手渡しされることとなった(実際には、諸手続きの遅延により10月~1月分を2月にまとめて学生に手渡すことになった)。

3) 支援活動の実際

コーディネーターの主な役割は、①利用者の支援希望講義とその曜日・時限、支援者として登録されている学生の支援可能曜日・時限の調査、②各講義への支援者の配置および調整、③予定通り支援活動が行われたかどうかのチェック、④各支援者の活動状況の筆者らへの報告(月1回)、⑤利用者と支援者間の関係調整、などであった。

支援者の配置の際には、なるべくかつてその講義を受けたことのある支援者を配置するなど、支援効率を最大にするため、利用者と支援者の双方の所属学科や学年、講義の種類を考慮する必要があった。

また、支援者の急用や急病に備え補助支援者の配置も必要であった。

活動のチェックには、利用者および支援者の氏名、活動日時、所感等を記す所定の支援報告書と利用報告書が利用された。所感の欄にはその時間の支援活動についての感想や、利用者および支援者の双方向の要望等が記された。支援活動が行われる度に、利用者は利用報告書を、支援者は支援報告書をメールアドレスに投函した。メールアドレスは学内の2カ所に設けられ、どちらでも利用しやすい方を利用できた。コーディネーターがそれらを回収、チェックし、利用報告書と支援報告書の両方がそろっているものを正式の支援活動として認定した。

また、支援者-利用者の組合せの調整や、支援活動を円滑にするための会合が定期的に行われた。

4. 評 価

1) 実施時期

後期終了後に支援会メンバーに集ってもらい、アンケートへの回答と、今回の試行実験や今後の支援活動についての自由な意見を求めた。

2) 評価参加者

参加者は11人であった。このうち9人がノートテイクで、他2人はコーディネーターであった。

3) 評価の観点

先述した促進的影響・抑制的影響を評価するため、アンケート(Appendix参照)の作成にあたっては次の観点を盛り込んだ。

報酬の種類・量について 金額は十分か/足りなかったか。報酬の種類は金銭でよかったのか、その他の報酬がよかったのか。支援者の健康保障の支援への要望はあるか。

報酬の遅延について 事務手続き上、支払いは月ごとに行なわれ強化が反応に遅延することになったが、この影響はどのようなものであったのか。

報酬システムが支援会に及ぼす影響 勧誘やメン

バーの維持に役立ったか。

支援者個人に及ぼす影響 やる気、責任感、精神的負担、ボランティア精神などに対して、どのようなものであったのか。チェック・活動報告書作成などの手続きの負担はどのようなものであったのか。

報酬停止の影響 試行実験が終了し、報酬システムがなくなった場合、やる気・責任感・精神的負担にどのような影響があると予想するか。

利用者との関係 関係に変化があったか。利用者の積極性（報酬を媒介とした対等な関係）が出現し、要望・文句を言われるようになったか。支援者から、利用者に要望を言いにくくなることはあったか。

大学として報酬システムを導入すること 今回の試行実験を通じた、大学や教員に対する評価はどのようなものであったのか。

これらに加え、全般的な感想、そして大学としては2004年度からボランティアセンターが中心となり聴覚障害学生支援が行なわれることに決定していたので、それらに関する意見を自由に記述してもらった。

Ⅲ. 結 果

1. 支援・利用状況

実験期間中の各支援学生の支援活動の概要とそれに対する報酬額を Table 1 に示す。支援活動に従事した学生の総数は14名であった。そのうち4名（A～D）がコーディネイト業務のみ、6名（I～N）がノートテイク等の支援活動のみ、そして残り4名（E～H）が両方の作業に従事した。

期間中の支援活動の延べ時間は294時間（内訳：ノートテイク等の直接支援：210時間、会合等を含むコーディネイト業務：84時間）、学生1人当たりの平均の直接支援時間は講義10.5コマ分の21時間（range：4～40時間）であった。

実験期間中の利用者の支援利用状況を、Fig. 1 に

支援会作成の支援者派遣コマ振り分け表（抜粋）によって示す。利用者 X（聴覚障害）は3講義（火曜1限〔以下、火1〕木3、金3）の支援を希望していたが、1講義（木3）の支援しか受けられなかった。しかもノートテイクは通常2名1組で行うが、1名の支援者しか配置されていなかった。利用者 Y（聴覚障害）は、1講義（金3）の支援を希望し、希望通り1講義の支援を受けた。利用者 Z（運動障害）は、8講義（月5、火1・4、水4・5、木4、金2・3）の支援を希望し、すべての講義に1名の支援者が配置された。

Table 1 期間中の支援活動時間と報酬額

支援学生	直接支援 (時間)	コ ー デ ィ ネ ー ト 業 務 (時間)	計 (時間)	報酬額
A	0	4	4	¥ 2,920
B	0	14	14	¥ 10,220
C	0	12	12	¥ 8,760
D	0	12	12	¥ 8,760
E	22	14	36	¥ 26,280
F	20	4	24	¥ 17,520
G	40	12	52	¥ 37,960
H	34	12	46	¥ 33,580
I	14	0	14	¥ 10,220
J	20	0	20	¥ 14,600
K	6	0	6	¥ 4,380
L	26	0	26	¥ 18,980
M	24	0	24	¥ 17,520
N	4	0	4	¥ 2,920
計	210	84	294	¥214,620

日 時限	月	火	水	木	金	土
1	(GN)	X:φ Z:I	(L)	(LJ)	(GL)	
2	(I)	(LN)	(GL)	(LJ)	Z:M (IL)	
3	(I)	(IG)	(ILM)	X:L	Z:F,X:φ Y:HG(L)	
4	(KNF)	Z:G (MF)	Z:J(I)	Z:K	(L)	(F)
5	Z:L	(G)	Z:F(I)	(L)	(J)	(F)

※凡例…利用者（X-Z）：支援者（A-N）、φは支援者配置なし、（ ）内は待機要員

Fig. 1 支援者派遣コマ振り分け表
(2003. 5. 19支援会作成のものより抜粋)

2. 評価

ノートテイクを行なった9名のアンケート結果を Fig. 2-a, 2-b に示した。この回答の内、1, 2. を否定的回答、4, 5. を肯定的回答、3. を中間としてまとめ、否定・中間・肯定それぞれへの回答を同確率と仮定して χ^2 検定を行ない、有意差が認められた場合ライアンの名義水準を用いた多重比較を行なった。有意差が認められた項目は以下の通りである。

「a. 金額」「j. 責任感」について有意差が認められ ($\chi^2=12.67, P<.01$)、多重比較の結果否定-肯定間・中間-肯定間に有意差 ($p<.05$) があった。「g. 勧誘」「h. メンバー維持」「i. やる気」について有意差が認められ ($\chi^2=6.00, P<.05$)、否定-肯定間 ($p<.05$) に有意差があった。「t. 利用

者に要望を」について有意差が認められ ($\chi^2=6.00, P<.05$)、否定-中間間に有意差 ($p<.05$) があった。「u. 大学のやる気/関心を」「v. 教員のやる気/関心を」について有意差が認められ ($\chi^2=18.00, P<.01$)、否定-肯定間・中間-肯定間に有意差 ($p<.01$) があった。

「m. 活動時間のチェック」の手間、報酬システムがなくなった場合の「n. やる気」「o. 責任感」の変化、報酬システム導入により「s. 利用者に文句を言われるようになった」かどうか、については有意傾向が認められた ($\chi^2=4.67, P<.10$)。

3. 自由記述・討論

アンケートの自由記述で複数回答のあったものを2名の評定者の合意によって Table 2-a, 2-b にま

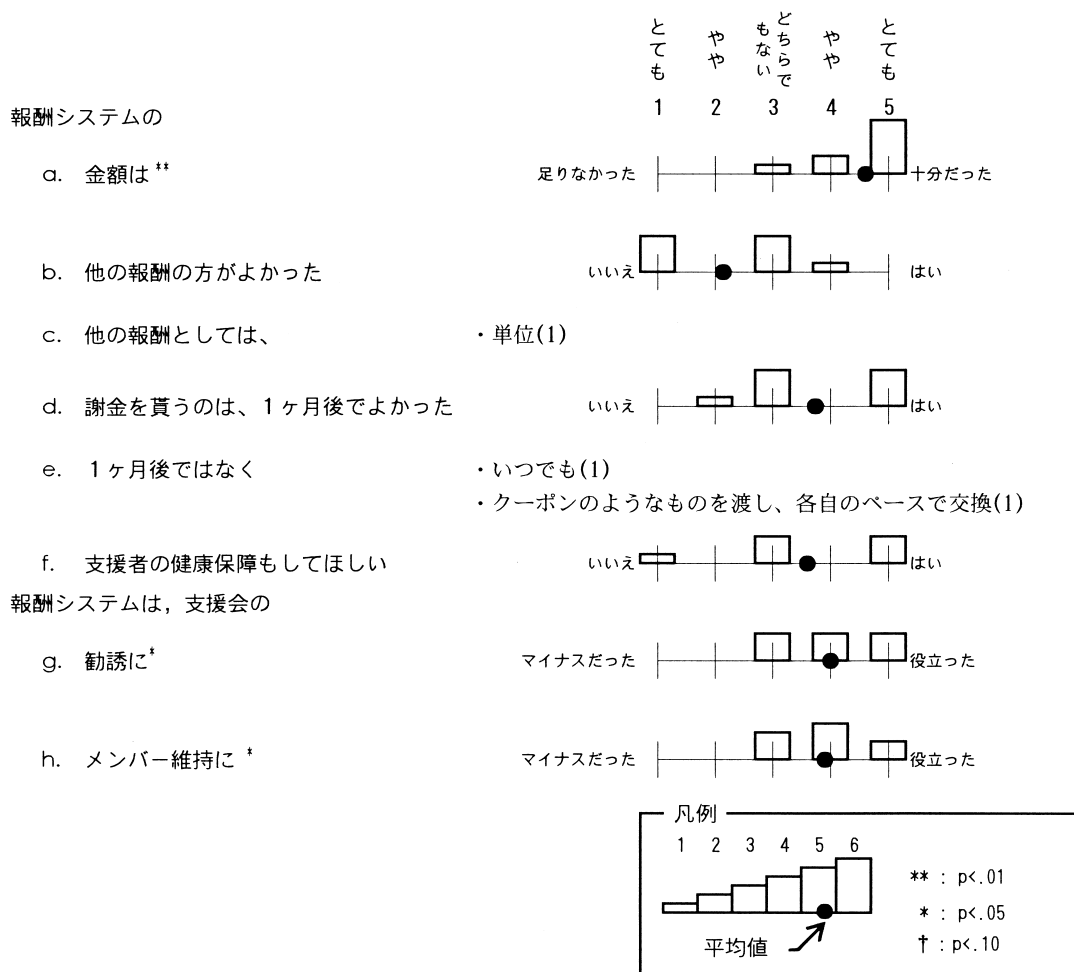


Fig. 2-a アンケートの結果

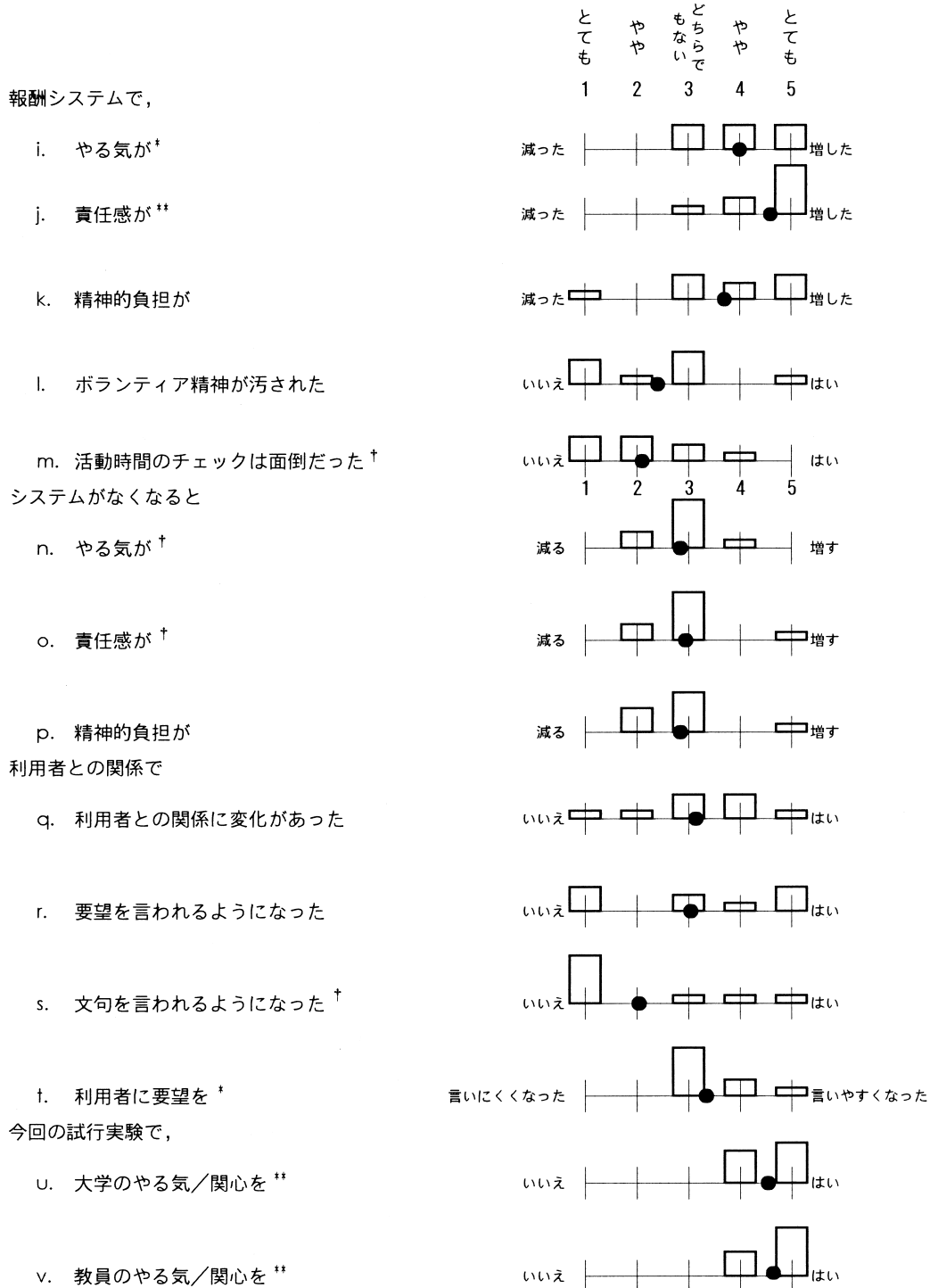


Fig. 2-b アンケートの結果 (つづき)

Table 2-a アンケート自由記述の結果

アンケートの自由記述の回答を複数回答のあったものをまとめた。尚、括弧内の数字は回答件数である。

全般について (33)

よかった点 (21)

責任感・やる気が増した (8)

- 仕事に対して責任感とやる気が増したことで、情報保障活動を熱心に行なえるようになった。
- 仕事という意識を持って、取りくんでもらえた。
- アルバイト代という形で自分の活動が評価されている気がした。

支援者確保に役立つだろう (2)

- 今まで、勧誘しても関心を持ってくれなかった人も、向こうからどこでしているのか、どんな事をしているのか聞いてきてくれた。
- 給料を出すことで、来年から支援者も増えることも考えられます。

利用者・支援者の関係 (4)

- 新しいことをはじめるにあたって、支援者も利用者も、よく話し合えたのではないと思う。
- 申し訳なさそうにお礼を言われていたので、心苦しかったが、お金の支給があるということで、利用者ともお互いに軽減された。

制度としての支援：大学・教員の理解 (3)

- 今まで学生や先生たちだけで、苦勞して支援を行なってきたけれど、学校側が理解を示してくれることで、今後さらに支援の幅が広がっていきけるという点でよかったです。
- 情報保障の必要性を学校側に理解してもらうために大きな一歩になったと思います。

悪かった点 (12)

報酬システムの問題 (2)

- 報酬を受け取ったので1月末で、最後の活動から結構な時間が経っていたため、活動に対しての報酬という実感がなかった。
- 悪いというよりは、自分自身に対して、今回は、ノートテイクではなく、板書とかの支援だったので、ノートテイクとかの人たちに比べると、かなり負担が軽かったと思って、同じだけの時給で、報酬をもらっているのかなと思った。

支援者不足 (2)

- テイカーの人数不足。利用者が希望している講義を保障しきれなかった。

利用者の意見がほしかった (3)

- テイカーの書いたことが本当に利用者に役立つのか、又書きとり方が自己流になりがちであるので、利用者はそれに対しどう思っているのかわからなく、客観的な評価がえられず、自分が書いたことに対し、少し不安があった。利用者がどう思っているのか、それを伝えて欲しいと思った。
- 研究段階であるからかは、分かりませんが、利用者側にあまり変化がなかった。金銭がでているアルバイトであるのだから、利用者も不満を言ってくれば良かったのと感じた。
- それなりの支援ができたか、利用者さんから見て、大丈夫だったかとか。

コーディネートが難しい (2)

- コーディネーターと連絡がうまくつかず、支援会がどのように動いているのか等、知ることができなかった。
- コーディネートをしきれなかった。学生の理解不足→テイカーの人数が増えない。利用者との連絡不足。

大学の制度としての支援 (2)

- テイクをしている講義の先生と連携をとるべきと思った（理解を得てもらう）。
- 相手が報酬をもらって当然という気持ちが芽生えてくると、運営者側の対応がおろそかになってしまう。情報保障者のみではなく、運営者の道徳性や倫理綱領を作ったほうがいいのではと思う。

Table 2-b アンケート自由記述の結果（つづき）

アンケートの自由記述の回答を複数回答のあったものをまとめた。尚、括弧内の数字は回答件数である。

ボランティアセンターの支援システムに (34)

期待する点 (24)

大学の制度としての支援 (4)

- 学校の公的な保障という名目だけではなく、その中身も学校当局が活動状況を把握して欲しい。外部から質問されても、どこに問い合わせても制度を説明できる状態であって欲しい。
- 例えば、新入生の中に聴覚障害者がいることの理解が早くなる。
- 学校も協力して運営していけるので、支援会が継続して行なわれていくこと。

ノートテイク以外の支援 (2)

- ノートテイク以外の手段を使えないか。例えば手話通訳、パソコン通訳、OHP、個人の持っている補装具の使用を認めてほしい（最大限）。
- 支援＝ノートテイクという考えをされると困る。→今のところは、ノートテイクという講義内だけの支援となっているが、本来は、大学に入学したという（大学が受け入れたという時点で）時点で、支援は始まっていると考えるべきである。生活支援を第1に考える時が来てほしい。

コーディネーター (3)

- 情報保障コーディネーターが専門として活動してくれること
- コーディネーターが大変で、講義中などに来て対応できなかったのが、コーディネーターに期待したい。

支援者の確保 (7)

- アルバイトという形をとる事で支援者が増える事を期待します。
- ボランティアセンターに来る人は、本当にボランティアがやりたくて来るので、いろいろと考え、頑張ってくれるのではないと思う。
- 学校全体として、情報保障の必要性を知ってもらえることができると思うので、今まで知らなかった人が、関心を持って情報保障者が増えることを期待します。

支援者養成 (3)

- 定期的な養成講座（の開講）

利用者・援助者へのサポート (5)

- テイカーと利用者の心理状況に対する相談（心理相談室の設置）。
- 技術と心理面の両方に対し、中立（利用者とテイカー）の立場で支援して欲しいと思う。
- 利用者・情報保障者の情報交換の場などを設けてくれること。
- 利用者と支援者の意見交換。よく話し合えるといいと思う。

不安な点 (10)

大学として、どこまで運営してくれるか (3)

- ボランティアセンター自体活動があいまいなので、きちんとしてくれるかが不安。
- 事務的に運営することによって、情報保障者と利用者との人間性を無視されるとか利己的な人が運営することが一番の不安。運営者が立場が強くなることで、情報保障者・利用者側から要望が言いづらくなるのでは？支援会の位置は？
- 大学の先生がどこまで理解しているか。浸透しているのか。

支援の質の低下 (4)

- 支援者が増え、テイカーの質が低下するかもしれない。
- 誰にでもやってもらいたいけれど、お金目的だけのきとくような支援にはならないようにしてほしい。おためし期間を作り、その人を採用するかどうかを見とくかを試してみたいと思います。

とめ、回答例（原文のまま）を示した。これにアンケート後の討論での話題を加味すると以下の意見があった。

1) 全般的感想

よかった点 報酬システムの導入によって、活動が評価され責任感ややる気が増した。またこのシステムは支援者の確保に役立つであろう。／支援者に報酬が払われることで利用者の心理的負担が軽減されたようで、それに対する支援者の心理的負担も軽減した。／報酬システム自体の効果ではないが、試行実験の実施にあたり利用者と支援者が話し合う機会ができた。／大学全体として支援を理解する契機になったのではないかな。

悪かった点 報酬システムに関する提言として、仕事内容によって報酬の格差を設けてもよいのではないかな。支援者不足で、利用者の要望に対応しきれなかった。利用者－支援者のコーディネートが難しかった。支援に対する利用者の要望・意見を言っただけで済んだ。／大学として支援するならば、講義担当教員との連絡や倫理綱領が必要になろう。

2) ボランティアセンターでの支援に対して

期待する点 名目だけではなく、実質的に支援してほしい。ノートテイク以外の援助手段、講義外の支援も考慮してほしい。コーディネート業務、支援者の確保や養成、そして利用者－援助者への側面サポート（意見交換の場の設置や、相談の実施）を期待する。

不安な点 支援での運営から大学当局の運営になり、どのようになっていくのか。運営側が強くなり利用者－支援者の要望が言いづらくはならないかな。報酬システムで支援者が増えたとしても、それにより支援の質が低下しないかな。

IV. 考 察

1. 実施状況について

今回の試みは、報酬の支払いが遅延してしまった

ことを除き、比較的スムーズに実施できた。これは、この試みがもともと支援会の要望に添うものであり、支援会の全面的な協力が得られたことによるところが大きい。

実際の支援活動では、延べ210時間のノートテイク等の直接支援が行われたが、利用者の需要に対する支援の供給が不足していることが改めて確認された。利用者が支援を希望する時間と、支援者が支援できる時間とが必ずしも一致しないこと、複数の利用者の支援希望時間が重複する場合があること、支援者の絶対数が不足していること、などがその理由である。支援者も学生である以上、自身の授業を優先しないわけにはいかない。

また、支援者の技能レベルの向上も重要な課題である。本実験期間中には実施されなかったが、支援者の技能向上のための研修活動（講師招聘のための費用など）にも金銭的な裏付けは不可欠である。

一方、コーディネート業務には延べ84時間が費やされたが、コーディネーターにはこの数字には表れてこない苦労があることも明らかになった。利用者、支援者双方の急な予定変更への対応、両者の関係調整など、デリケートな問題を扱わなければならないことも多く、アンケートには「24時間休みなし」という状況の記述も見られた。利用者や支援者と同じ立場の学生がコーディネーターの役割を果たすことの負担は想像以上に大きいと思われる。

2. 促進的影響／抑制的影響について

前報（大野ら、2004）の調査に続き、今回は支援者への報酬システムを試行的に導入し、その影響を見た。実施にあたり、責任感・やる気の増大、支援者確保などの促進的影響と、精神的負担の増大や試行終了後の動機づけの低下など抑制的影響が想定され、それらを評価するためにアンケート調査を実施した。

アンケートの分析からみると、今回の報酬金額は

十分であり、報酬システムの導入により支援者の責任感が増した。報酬額を算出するために行なわれる支援の実施時間のチェック方法は、特に面倒ではなかった。

支援者の勧誘、会のメンバー維持、支援者のやる気に対しては、否定的よりは、肯定的な影響を与えていた。

利用者と支援者との関係に置いては、利用者への要望がしにくくなることも、利用者から文句を言われるようになることも特になかった。

今回のシステム導入は実験的に行なわれたが、試行期間が終了して報酬が与えられなくなっても、支援者のやる気や責任感に変化がないことが予想された。

この試行実験を通して、支援者は大学や教員のやる気／関心を感じた。

以上の結果より、報酬システムの導入によって抑制的な影響はなく、促進的に働く、すなわち、手続き的な負担は感じず、支援者のやる気・責任感を強め、支援会の維持と支援者の勧誘に役立つことが示された。同様の結果は、アンケートに付した自由記述からも伺われた。

自由記述に現われた問題点として、支援の負担が少なかったのに同じ報酬を貰って良かったのか、支援者が足りない、利用者の意見・要望が聞きたかった、利用者と支援者とのコーディネートに上手くいかないことがあった、などが示された。報酬の料金については、経験や技術によって差を設けることも考えられよう。支援会から大学への要望書の資料では、支援のための技術講習を受講した支援者とそう

でない者とは報酬に格差を設けている大学もあった。料金格差の提言を除き指摘された問題は、報酬システムの問題というよりは、現行の支援状況の問題であると考えられる。

本学では聴覚障害のある学生に対するノートテイクによる支援を2004年度からボランティアセンターを中心に実施することになった。大学による支援について支援者が期待しているのは、上記の問題点の解決、すなわちコーディネート業務と支援者の確保、そして支援活動のサポートであった。サポートには支援の質を向上させるために養成講座や支援技術の講習会を行なうこと、これまでは利用者と支援者という2者間の関係だけであったが、これに2004年度からは大学というもう一つの立場が加わることになり、2者間の調整、例えば、利用者－支援者双方の意見・要望などを話し合う場を設けること、それぞれからの相談を受けることなどが期待されていた。また大学が積極的に関与することで、現在行なっているノートテイクだけではなく、支援手段の拡大（手話通訳、パソコン通訳など）・支援対象の拡大（授業・情報支援だけではなく、生活支援も）なども期待されている。

ボランティアセンターでの実施に関する不安としては、運営面と、支援者が増えた場合の支援の質の低下が懸念されていた。これらはボランティアセンターが関与することに対する不安というよりは、これまでの有志による支援活動から、大学を巻き込んだ制度としての支援に移行していく上での不安であろうと考えられる。

引用文献

- 1) 大野裕史・日上耕司・奥田健次・小林重雄(2004) 大学における障害のある学生への支援システムに関する調査研究. 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要, 9, 207-216.
- 2) 白澤麻弓・徳田克己(2002) 講義保障について 斎藤佐和(監修) 聴覚障害学生サポートガイドブッカーともに

Appendix

No. 2

報酬システムと支援会の関係について伺います。

報酬システムは、支援者の

g. 勧誘に
マイナスだった | 1 2 3 4 5 | 役立った

h. メンバー維持に
マイナスだった | 1 2 3 4 5 | 役立った

あなた個人について伺います。

報酬システムの導入で、あなた自身、支援に対する

i. やる気が
減った | 1 2 3 4 5 | 増した

j. 責任感が
減った | 1 2 3 4 5 | 増した

k. 精神的負担が
減った | 1 2 3 4 5 | 増した

l. 金銭によってボランティア精神が汚された気がした
いいえ | 1 2 3 4 5 | はい

m. 活動時間のチェックは面倒だった
いいえ | 1 2 3 4 5 | はい

今後、報酬システムがなくなったら

n. やる気が
減る | 1 2 3 4 5 | 増す

o. 責任感が
減る | 1 2 3 4 5 | 増す

p. 精神的負担が
減る | 1 2 3 4 5 | 増す

No. 3

利用者の方との関係について伺います。

q. 利用者との関係に変化があった
いいえ | 1 2 3 4 5 | はい

どのような (自由記述欄)

以前に比べ、利用者から

r. 要望を言われるようになった
いいえ | 1 2 3 4 5 | はい

どのような (自由記述欄)

s. 文句を言われるようになった
いいえ | 1 2 3 4 5 | はい

どのような (自由記述欄)

利用者に要望を

t. 言いにくくなった | 1 2 3 4 5 | 言いやすくなった

今回の件で、障害学生支援に対する

u. 大学のやる気/関心を感じた
いいえ | 1 2 3 4 5 | はい

v. 教員のやる気/関心を感じた
いいえ | 1 2 3 4 5 | はい

その他全般について伺います。御自由にお書き下さい。

よかった点 (自由記述欄)

悪かった点 (自由記述欄)

次年度からボランティアセンターが中心になり、新しく支援システムが立ち上がりますが、それに

期待する点 (自由記述欄)

不安な点 (自由記述欄)

御協力ありがとうございました